

高知県で心理学研究を推進した先人達の 中国四国心理学会における足跡を辿って

○野中陽一朗¹・井上 弥²

(¹高知大学教育研究部人文社会科学系教育学部門・²広島大学大学院教育学研究科)

問題と目的

心理学徒は、研究をどのように推進していくのだろうか。心理学の学問としての枠組みが、拡大及び深化することに伴い、研究は専門分野や領域に分化して進展する。そのため、心理学に身を置く先人達の足跡は、後進の今後の歩みを照らすものとなる。このような視点に立脚した際、我々には、自身の身を置く各学会における先人達の研究発表を踏まえた上で新たな地平を切り開いていくことが求められる。中国四国心理学会では、深田(2005)が学会の歴史や現状を体系的に概括している。しかし、発表内容に関して、会員の所属地区の観点から検討はなされていない。

そこで、本研究では、中国四国心理学会で発表された論文集の中から高知県に所在地を置く研究機関所属の心理学徒の抄録に着目し、各年代の総発表数、専門領域別の発表数、専門領域別抄録における著者数の平均人数を検討する。

方 法

分析対象 定期刊行物が、中国四国心理学会論文集に改称後、1967年から2015年までに刊行された総計48巻に掲載の抄録4744編¹⁾から抄録の著者の中に所属所在地が高知県にあると考えられた102編を分析対象として選定した。

手続き 論文集目次記載の専門領域からは、総計18種類²⁾の専門領域が見出された。そこで、深田(2005)の区分した8つの専門領域を参考に、生理・認知³⁾(学習、生理・知覚、知覚、学習・生理、知覚・感覚、知覚・認知も含む)、発達、教育、人格(人格・臨床、教育・人格、人格・検査も含む)、臨床(臨床・犯罪も含む)、障害、社会(社会・産業も含む)といった7つの専門領域区分を採用した。領域区分及び12巻を1周期とする年代区分⁴⁾に基づき抄録数や著者数の平均人数を算出した。

結果および考察

専門領域と年代で構成された各枠組みに包含される発表数や著者数の平均人数について整理を行った(Table 1)。その結果、第1期を基にした場合、第4期は総発表数が極端に減少していた。また、第1期には臨床の発表数が多いものの、第2期以降は教育の発表数が多くなっていた。専門領域の選定は、著者の自己申告に基づくものである。そのため、本研究の知見は、各学徒の専門領域選定の背景にある学問的理論の存在を示唆するものと考えられる。今後は、各学徒が、地方学会、全国学会、国際学会での学会発表をどのように自身の研究の深化に活用しているのかキャリアを踏まえた縦断的な検討も必要となろう。

Table 1 年代区分における各専門領域における発表件数の推移及び著者数の平均人数

年代 区分 ⁵⁾	生理・認知		発達		教育		人格		臨床		障害		社会	
	発表 数	著者数 平均	発表 数	著者数 平均	発表 数	著者数 平均	発表 数	著者数 平均	発表 数	著者数 平均	発表 数	著者数 平均	発表 数	著者数 平均
第1期(42)	6	2.5	2	3.5	5	2.6	5	5.0	17	2.5	3	4.0	4	2.5
第2期(20)	4	1.5	2	2.0	7	2.4	0	0.0	2	1.0	4	1.0	1	3.0
第3期(33)	3	1.7	5	1.0	12	1.3	0	0.0	4	1.0	3	1.0	6	2.3
第4期(7)	0	0.0	0	0.0	3	2.0	1	2.0	0	0.0	1	1.0	2	1.5

¹⁾ 1971年の他学会との共催時の論文集は、深田(2005)と異なり、学会区分をせずに整理した。

²⁾ 18種類の専門領域区分は、単独領域(9種類)だけでなく、2つの複合領域(9種類：順番が異なるものは同一と判断)からも構成されていた。

³⁾ 本研究で対象の102編には、認知の単独専門領域はなかったが、区分名は深田(2005)に準拠している。

⁴⁾ 年代区分は、第1期(1967～1979年)、第2期(1980～1991年)、第3期(1992～2003年)、第4期(2004～2015年)となる。なお、1969年は年次大会が開催されていないことに留意する必要がある。

⁵⁾ 各年代区分の横に明記した()内は、当該年代区分の総発表件数を示した。